

4

国連「高齢化に関する国際行動計画」採択10周年記念会議(1992年9月30日~10月2日 NY国連本部)

未来に向けてエンジンの再点火を

■高齢化10年の取り組み

1982年に私たちは大いなる希望と期待を抱いてオーストリアのウィーンに向かった。このときに開催されたのが国連の「第1回高齢化に関する世界会議」である。124カ国の代表が一堂に会し、「高齢化に関する国際行動計画」という画期的な文書を苦心して作り上げた。社会を転換させるような重大な出来事に対して人道的にも、進歩発展という面からも周到な対応ができたという喜びから私は大変に興奮したことを覚えている。

そして10年後の今、私たちはここに集まっている。このようなことを口にするのをお許しいただきたいが、しかし、どうしても申し上げないわけにはいかない。10年前に提示された問題や課題の重要性に見合った報告は、国連加盟各国の政府からも国連そのものからも事実上皆無なのである。

わずかながら報告があった活動の多くはジュリア・アルバレス大使が先頭に立って行ったものである。例えば、バンヤン基金の創設に対する援助や母国ドミニカ共和国における活動などである。

マルタ島にはINIA(国際高齢化研究所)があり、第三世界や開発途上国を対象に、応用老年学と訓練とに精力的に取り組んでいる。

米国では、政府が協力的ではなかったため、当時国際高齢化に関するアメリカ協会(American Association of International Aging)という民間セクターがイニシアチブをとって細々と活動

していたが、今年になってついに解散を余儀なくされてしまった。AARP(全米退職者協会)は国際的な高齢問題に貢献しようと努力を重ねている。もちろん、これ以外にも尽力している多くの団体もある。

米国政府の怠慢の一つは、国連への分担金を全額支払おうとしないことだ。この件に関しては米国だけがそうだというわけではないが、米国は負債の絶対額では第1位で突出している。

■世界的無秩序を生むもの

私たちは人間の生態や行動に関してほんのわずかしかなかったりもかかわらず、そのことを認識せず、自己中心的なナルシズムにふけっている。世界中で大量殺戮や異民族間の紛争が絶え間なく続いている。核兵器は拡散を続け、文化と英知があるとされる多くの国々によって弾薬や通常兵器が売買され続けている。これはしいていえば新たな世界的無秩序である。ナルシズムとあいまった心の狭さは、無知という大陸にたとえられるほど大きなものである。人と人、集団と集団との距離は、地球と火星よりはるかに隔たっている。この悲劇的な距離は残念ながら縮まってはいない。

はるか昔にコペルニクスは、地球は宇宙の中心ではないことを明らかにし、近代科学の発展を助長した。ダーウインは、私たちは皆、進化の連鎖の一部であること、そして人類

は宇宙の中心ではないことを証明してくれた。また、近代科学により、宇宙論から医学に至るまで多くのことを私たちは学んだ。このようにして私たちは自然の規則性や法則に関していくらかのことを学んだが、人間の破壊力についてはほんの少ししか理解していない。

例えば、生物の多様性について考えてみると、美しい熱帯林は、世界の面積、すなわち陸地の2%でしかない。その熱帯林を人間は徐々に破壊している。その中には何百万もの種類の生物が存在しているが、1日に少なくとも50種の生物が消えていると推測されている。私たちが使用する薬の4分の1は植物の生成物がもとになったものであるから、私たちはつまり、自分たち自身の生活の質と生存基盤を破壊していることにもなるのだ。

米国では1990年代は脳に注目が集まっている。にもかかわらず、国立神経学医療研究所の新しい予算はわずか4%増えただけであり、本年は中枢神経系の応用科学研究のわずか10%にしか助成金がついていない。

おそらく今後の最大の敵は無知と否認、そして直面すべき極めて重大な問題の現実を認めないことである。

■ 自己責任の傘を掲げて

私がこの式典を台無しにしてしまったとしたら誠に申し訳ないと思う。しかし、私たちは本当に真剣になる必要があり、この祝典を行動の一つのステップとして考えるべきだと思

う。あなたに傘を差し上げたい。その傘には「自己責任」と記されている。あなたは自分の傘を高く掲げなければならない。慎重になったり消極的になったりせず、一人ひとりがこの10周年記念会議においてドラマチックに高らかに発言すべきである。

私たちは加盟各国の政府に対し、言い訳や駆け引きや美辞麗句は止めて、国連の分担金と生物多様性、環境、児童、高齢者といった特別の目的のための基金を拠出するように求めなければならない。

第2に、ヴァイリー・ブランド元ドイツ首相の南北関係に関する重要な文書を再度検討する必要がある。先進国には開発途上国に対し、その国にとって実際に利益になるものを教える責任がある。開発途上国に対して敏感でなければ、エイズやコレラ、結核といった病に関して多大な代償を支払うことになる。開発途上国に注意を払うことは私たちのために非常に重要なことなのである。

第3に、高齢者という未開発の資源を活用する必要がある。エネルギーと能力を兼ね備えた高齢者は、自ら先頭に立って年齢についての意識改革へのリーダーシップをとるべきである。

米国において定年退職を事実上終結させた「雇用における年齢差別禁止法」が世界のすべての国で立法化されるべきである。アルバレス大使の「開発途上国では多くの場合、退職は機能面を理由になされるものであって、法律に



よってなされるものではない」との素晴らしい報告があった一方、働き続けることができる有能な人々を法律によって退職させている国も残念ながら多い。

プロダクティブ・エイジングを新しい概念の一部にすべきだ。あえて言わせていただくならば、国連も襟を正す必要がある。私たちは行政面、管理面、予算面の問題に気づいている。私たちが地球の存続を目指すのであれば、日本やドイツといった力のある国々を新たに安全保障理事会に参加させ、世界平和維持の一部とするべきだと私は考える。

第4に、NGO、NPO、篤志家、企業から多くの支援を得なければならない。コロンブスが新世界を発見したように、私たちはシルバー産業という新しい市場を見出した。シルバー産業はこの大きな挑戦への取り組みを支援するうえで企業にも役割を果たせるチャンスがあることを意味している。

第5に社会保障の受給権や福祉国家に対する非難が激化していることから、私たちは社会的保護の財源の多様化あるいは方式の多角化の必要性を認めなければならない。もはや政府だけを頼るわけにはいかないのだ。

私は医師として、誰が脳溢血や多発性硬化症にかかったり、交通事故に遭ったり、エイズに感染したりするかを予知する方法はないと断言できる。個人、家族、地域社会、労使双方を含む事業体、そしてあらゆるレベルの行政が一体となって自分ではどうすることもできない社会的災難から人々を守る責任がある。

■未来を拓くために

人間の命には一貫性と継続性がある。現在高齢者となっている人々はかつては子どもであったし、現在の子どもはいずれ高齢者になる。世代間のつながり、特に中年の人々には是非注目していただきたい。

哲学者のアルトゥル・ショーペンハウアーによれば、中年とは、生まれてからの年数を数えるのではなく、死ぬまでの年数を数え始める時点と定義されている。この中年期というのは米国では特別の意味を持っている。つまり米国史上で最も人口の多い世代、ベビーブーマーなのである。ベビーブーマーの一番年長の人々は現在46歳で、米国人口の3分の1はこの世代で占められている。これが米国において関心を持たせなければならない集団である。加盟国の多くにおいても、この世代は最も大きな責任を負い、最も力を持っている集団である。だからこそ、中年層にこの問題を理解してもらいたいのだ。

未来は未来に備える人々のものである。未来を否定したり、無視したりすることは自らの墓穴を掘り、自らのタイヤを切り裂くことである。

今こそ私たちはエンジンに再び点火し、今後さらに10年も待つことはできないこと、そして世界が直面している信じられないほどの空前の長寿という挑戦に対して、地道な取り組みを始めるべきことを自覚するときなのだ。